

カトマンズ・ネパール語の名詞修飾

松瀬育子

ネパール言語文化研究所

imatsuse@gmail.com

1. はじめに

〈本発表の目的と帰結〉

- ・名詞修飾プロジェクトの根源的な問題の1つである「言語はどのような要素で名詞を修飾するのか」に焦点を当て、カトマンズ・ネパール語の3種の名詞化辞 (=mha/=pĩ:/=gu) の振る舞いを記述し、その機能を考察する。
- ・名詞化と関係節化の関係について、“relativization is a subpieces of clausal nominalization” とする DeLancey (2002) の主張を支持し、その体系化には柴谷 (2009)、Shibatani (2018) の枠組みが有効であることを述べる。

〈本発表の手順〉

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 2 節：カトマンズ・ネパール語の概要 | 3 節：先行研究 |
| 4 節：名詞化辞の振る舞い | 5 節：主名詞と修飾要素の意味関係 |
| 6 節：名詞化と関係節化の関係 | 7 節：まとめ |

2. カトマンズ・ネパール語の概要

- ・シナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派に属す
- ・ネパールのカトマンズ盆地一帯で話される
- ・カトマンズ盆地では、公用語であるネパール語（インド・ヨーロッパ語族、インド・アーリア語派）よりも古い歴史を持つ（正式名 *Nepāl Bhāsā*（ネパールの言語））
- ・方言を含めたネパール語の母語話者数は84万7千人（2011年国勢調査）

〈言語構造〉

- ・SOV 語順、後置詞型、能格配列システム（他動詞の主語は ERG（能格）で表示）
- ・名詞句の特徴：3 種の名詞化辞の存在 類別詞の存在
- ・動詞句の特徴：Conjunct/Disjunct の活用形（Conjunct は話者の意図的行為を表示する）
独立節と埋め込み節では異なる動詞活用形が使われる（非一人称主語）

3. 先行研究¹

▶ Kölver (1977) : ネパール語の名詞化辞の機能を考察し、名詞化とする (cf.) Matisoff 1972)

(1) *tatāh-yā-gu bā:lā-gu hyāū:-gu parsi*

elder.sister-of-aff. pretty-aff. red-aff. sari

“the elder sister’s beautiful red sari”

▶ O’Rourke (2000) :

① Keenan and Comrie (1977) 等で示された Noun Phrase Accessibility Hierarchy (以下 NPAH と称す) の適用範囲を調査。TB 方式では、(2) の階層性において GEN の possessor は用いら

¹ カトマンズ・ネパール語の名詞修飾と名詞化辞に関する先行研究として、Kölver (1977)、O’Rourke (2000) の他に、Hale (1985)、Malla (1985)、DeLancey (1986, 2002)、Hargreaves (1989)、Genetti (1992, 1994)、Hale and Shrestha (2006) 等がある。

れにくい、OCOMPのcomparative objectを含めたGEN以外の全てで容認されると報告²。

(2) NPAH: SU > DO > IO > OBL > GEN > OCOMP

②関係節化と名詞化の関係についてはGenetti (1992, 1994) を支持。Genettiは関係節化と名詞化が異なる構造を持つと主張(gapの有無)。これは、DeLancey (1986)、Noonan (1997)の“relativization is a subpieces of clausal nominalization”の主張を退けることを意味する。Genettiを支持する根拠として(3)(4)を挙げる。

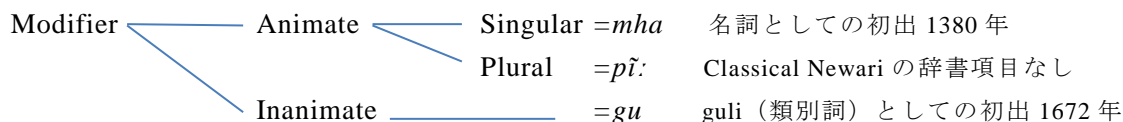
- (3) a. [mhae] [pujA yA-A-mha] kha:
[farmer] [worship do-STAT-REL] be.STAT
'The farmer is (the one) who did worship.'
b. [mhae-nã: pujA yA-A-gu] kha:
[farmer-ERG worship do-STAT-NOM] be.STAT
'(It is true that) the farmer did worship.'
- (4) a. [mhae] [pujA yA-A-mha manu:] kha:
[farmer] [worship do-STAT-REL person] be.STAT
'The farmer is the person who did worship.'
b. *mhae-nã: pujA yA-A-gu manu: kha:

O'Rourkeの議論:(3a)はheadlessの関係節、(4a)は主名詞明示の関係節。(3b)が名詞化、ゆえに(4b)が容認不可。この議論には問題があり、本稿の反論は第6節で。

4. カトマンズ・ネワール語の名詞化辞の振る舞い

・名詞化辞が3種(=mha/=pĩ:/=gu)あり。主名詞の有生性と数により使い分ける(5)。

(5) 名詞化辞の区分(Kölver 1977、Hale and Shrestha 2006)



名詞化辞の連続的用法:名詞(修飾)用法(関係節と準体用法を含む)、補文節用法、文全体を受ける文末用法(ノダ相当文と文末名詞化辞)。無生物を表す=guがより多機能。

4.1 準体用法を含む名詞修飾構造

Dixon (2004)でcoreとされるDimension, Age, Value, Colorを指す形容詞が現れる場合、(6)のパターンを示す。以下の(6)-(12)では、文脈によって同定可能な場合、主名詞が現れない形式(準体用法)が容認される。

(6) 形容詞+名詞化辞+(名詞)

- a. *bã:lã=mha* *manu*³
すばらしい-NMLZ 人
- b. *bã:lã=pĩ:* *manu:-ta*
すばらしい-NMLZ 人-PL

² TB方式はTibeto-Burman strategyを表し本稿で考察する名詞修飾の様式である。O'RourkeではTB方式の他にIndo-Aryan strategy(IA方式)についても調査している。

³ *bã:lã*「すばらしい」は動詞的形容詞であり、動詞は*bã:lã-ye*「すばらくなる」である。形容詞は形態の面から3種(単純形容詞、名詞的形容詞、動詞的形容詞)に分けられ、さらに、動詞の状態形が形容詞としても用いられる。

「すばらしい人」 「すばらしい人たち」

c. *bã:lā=gu* *chě:*

すばらしい-NMLZ 家

「すばらしい家」

(7)形容詞の準体用法(大小にかかわるもの⁴)

a. *ta:-dhi=mha*

大きい-CL-NMLZ

「大きい(の) (大きな人)」

b. *ta:-dhi=pĩ:*

大きい-CL-NMLZ

「大きい(の) (大きな人たち)」

c. *tata:-gwa:=gu*

大きい-CL-NMLZ

「大きい(の) (大きな丸いもの)」

cf.) 類別詞との類似性 (*mha* は名詞としても使用、*gu* は *gu:* (*guli*) の短縮形)

a. *cha-mha manu:* (*manu: cha-mha*)

1-CL 人

「1人の人」

b. *cha-gu: de:*

1-CL 国

「ある国」

(8) 1人称・2人称代名詞+名詞化辞+ (名詞)⁵

a. *ji=mi (mha)*

私-NMLZ

「私の娘」

mhyāe

娘

b. *ji=mi*

私-NMLZ

「私の娘たち」

mhyāe-pĩ:

娘-PL

c. *ji=gu* *tapuli*

私-NMLZ 帽子

「私の帽子」

(9) 3人称代名詞/固有名詞+属格 *yā*+ (名詞化辞+) (名詞)⁶

a. *rām-yā(=mha)*

ラム-GEN-NMLZ 娘

「ラムの娘」

b. *rām-yā(=pĩ:)*

ラム-GEN-NMLZ 娘-PL

「ラムの娘たち」

mhyāe-pĩ:

c. *rām-yā(=gu)* *tapuli*

ラム-GEN-NMLZ 帽子

「ラムの帽子」

動詞句も主名詞に前置される。埋め込み節では、独立節の動詞形と異なり、非一人称主語の過去の動作を述べる場合、「状態形(ST)」をとる。

(10) 動詞句(自動詞)+名詞化辞+(主名詞)

a. *nakatini wa:=mha manu*

先ほど 来る ST-NMLZ 人

「つい先ほど来た人」

〈独立節〉 *wa manu nakatini wa-la.*

その人 先ほど くる-NFD

「その人はつい先ほどきた。」

⁴ 大小を表す形容詞の語形成: 大小を表す形態素に類別詞が付く。名詞句には名詞化辞が続く。

⁵ 「指示詞+名詞」では名詞化辞が現れるタイプと現れないタイプがある。近称では *thwa/thu-mha manu* (この人)、*thwa/thu-pĩ: manu:ta* (この人たち)、*thwa/thu-gu mari* (このパン) となる。

⁶ 「3人称代名詞/固有名詞+属格」に続く名詞化辞の有無と意味の違いについては、Kölver (1977)が論じている。

b. *nakatini wa:=pĩ: manu-ta*
先ほど 来る.ST-NMLZ 人-PL
「つい先ほど来た人たち」

c. *nakatini wa:=gu la:*
先ほど 来る.ST-NMLZ 水
「つい先ほど来た水」

(11) 動詞句（他動詞）＋名詞化辞＋（主名詞）

a. *lā chu:=mha misā* 〈独立節〉 *misā: lā chu-la.*
肉 焼く ST-NMLZ 女の人 女の人 ERG 肉 焼く -NFD
「肉を焼いた女の人」 「女の人

b. *lā chu:=pĩ: misā-ta*
肉 焼く .ST-NMLZ 女の人-PL
「肉を焼いた女の人たち」

c. *misā: chu:=gu lā*
女の人 ERG 焼く .ST-NMLZ 肉
「女の人

(12) 名詞述語文の名詞句

a. *rāma macā-bal-e khwa: jaka khwa:=mha kha:.*
ラム 子ども-時-LOC 泣く ST だけ 泣く ST-NMLZ COP.ST
「ラムは子供のころ、泣いてばかりいる子だった。」

b. *ana du:=pĩ: manu:-ta mhiga: nā: wa:=pĩ: kha:.*
あそこ いる ST-NMLZ 人-PL 昨日 も 来る ST-NMLZ COP.ST
「あそこにいる人たちは昨日もきた人たちだ。」

c. *wa: dhāyā=gu māe ninā:, cākalakā:*
ウォー 言う NFC-NMLZ 黒豆 挽く NF 丸める NF
chuyā-ta:=gu kha:.
焼く CM-おく ST-NMLZ COP.ST
「ウォーというのは、黒豆を挽いて丸めて焼いたものだ。」

4.2 名詞節・補文節の表示

無生物を表す=*gu*のみの用法。主文の主語、目的語を表す。

(13a)は主文の述語 *lāye*（治る）の主語、(13b)は *kaye*（当たる）の主語。

(13) a. *juju-yā nhāepā: syā:=gu lā-na.*
王さま-GEN 耳 痛い ST-NMLZ 治る-NFD
「王さまの耳が痛かったのが治った。」

b. *?macā: appā wā:chwayā ha:=gu gādi-i kal-a.*
子供 ERG レンガ 投げる CM くる CAUS.ST-NMLZ 車-LOC 当る-NFD
「子供がレンガを投げたのが車に当たった。」

目的語としては、*khane*（見る）、*tāye*（聞く）等の知覚動詞、認識動詞の目的語を表示する。

- (14) a. *mahri chunā-ta:=gu* *khanā: ipī: laetā-la.*
パン 焼く CM-おく ST-NMLZ 見る NF 彼ら 喜ぶ-NFD
「パンを焼いてあるのを見て、彼らは喜んだ。」
- b. *mhyāe-mhā: hālā ju:=gu jujū: yānā: nisē: tā:.*
娘-CL.ERG 叫ぶ CM なる ST-NMLZ 王さま ERG 遠い から 聞く ST
「娘が叫んでいるのを王さまが遠くから聞いた。」

4.3 文末での用法（ノダ相当文と文末名詞化辞文）

▶ =*gu* とコンピュータ動詞(*kha:*)が文末で用いられる。Hale and Shrestha (2006)はこの機能を strong assertion と見なす(15)。(詳細は松瀬 2016)

(15) ノダ相当文

- wa lā kha: ukī: chikapisā:*
それ EMPH COP.ST だから あなたがた(HON).ERG
jāpāni:-bhāe bhacā-sā: saeke-gu kuta: yānā
日本-言語 少し-COND(CONT) できる-NMLZ 努力 する CM
dii mā:-gu kha:
なさる(HON)FC 必要がある ST-NMLZ COP.ST
「そうです。だから、あなた方が日本語を少しでもできる努力をなさる必要があるのです。」

▶ 名詞化辞=*gu* は単独で文末に現れる：文末=*gu*（日本語の終助詞ノにはない用法）。

(16) の会話では聞き手の待遇を表す。

(16) 文末=*gu*（文末名詞化辞文）

- a. *ā: gana jhāyā dii tyanā=gu.*
今 どこ 行く/くる(HON)CM いる(HON)FD しようとする NFC-NMLZ
「今、どちらにお出かけ(の)ところですか。」
- b. *ji ā: bajār-e wane tyanā=gu.*
私 今 市場-LOC 行く FC しようとする NFC-NMLZ
「私は今、市場に行くところですよ。」

文末=*gu*：発話行為的意味を伴う。聞き手に対する待遇、できごと生起に対する話し手の知覚・認識の違い、想定外のできごとに対する驚きも表す。(17)は発見の驚きを表す。

(17) *āh mi:chan! thwa-jwa: thās-e kā cwanā-cwā:=gu.*

- あっ みいちゃん こんな ところ-LOC PRT いる CM-いる ST-NMLZ
「あっ、みーちゃん、こんなところにいたんだ。」

以上のように、カトマンズ・ネワール語の名詞化辞は（修飾）句、節、文末で機能する。

5. 修飾要素と主名詞の意味関係と主要部内在型

O'Rourke (2000)：格表示パターンを25に分けてNPAHの適用範囲を調査。

SU（主語）：能格主語、絶対格主語、与格主語。OBL（斜格）としてLOC（所格）、ABL（奪格）、INSTR（道具格）、COM（随格）、時間や様態を主名詞にとるものも列挙。

しかし、修飾要素と主名詞の意味関係に注意が払われているわけではない。ここでは寺村

(1975-8)「内の関係・外の関係」、Matsumoto (1997)、松本 (2014) の例文を見る。

5.1 主名詞と修飾要素の多様な意味関係

「内容補充的修飾」の「におい」「音」、「短絡」とされる「頭がよくなる本」、Matsumoto (1997) での「太らないお菓子」も容認される (18)。

- (18) a. *catā:=mari chu:=gu bās*
米粉-パン 焼く ST-NMLZ におい
「米粉パンを焼いたにおい」
- b. *lā dā:=gu sa:*
肉 ゆでる ST-NMLZ 音
「肉をゆでる音」
- c. *calākh jui=gu saphu:*
賢い なる FD-NMLZ 本
「賢くなる (頭がよくなる) 本」
- d. *lhwani: ma-khu(=gu mari:*
太る FD NEG-COP.ST-NMLZ 菓子
「太らないお菓子」

「ふつうの内容補充」の「事実」、「噂」、「相対性補充」の「おつり」、「結果」、「理由」も容認される (19)。(19a) では、「と言う」に当る *dhāi* がある方が安定的。

- (19) a. *prithvii gwa:lākār dhāi=gu sattya*
地球 丸い 言う FD-NMLZ 事実
「地球が丸いという事実」
- b. *manu-nā: drāg nyā:=gu hallā*
男-ERG ドラッグ 買う ST-NMLZ うわさ
「男がドラッグを買ったうわさ」
- c. *mari: nyānā=gu bā:ki: dhana*
パン 買う NFC-NMLZ 残った 金
「パンを買ったおつり」
- d. *kenedhi-yāta syā:=gu licwa:*
ケネディ-DAT 殺す ST-NMLZ 結果
「ケネディを殺した結果」⁷
- e. *pasa: suru yānā=gu kāran*
店 始まり する NFC-NMLZ 理由
「店を始めた理由 (動機)」

寺村と松本で指摘されているように、カトマンズ・ネワール語においても、修飾要素と主名詞の意味関係が内と外の関係に明確に二分されるわけではなく、意味関係は多様。(益岡 2009、松本 2014: 節主体型、名詞主体型、節および名詞主体型)

⁷ カトマンズ・ネワール語には受動文を表す形態はなく、被動者を表す名詞句を文頭に出すという手段が取られる他、動詞連鎖で受動的意味を表す。

5.2 主要部内在型関係節

坪本(1991)、黒田(1999):ノに前置される部分が節の形をとりながら、主文の主語、目的語として機能する(20a,b)。カトマンズ・ネワール語では(20a,b)は容認不可(21a, 22a)だが、3.2節で見た(13)もある。容認されるのは主名詞が出るタイプ(21b, 22b)。

- (20) a. 太郎が[[リンゴが皿の上にある]ノ]を取った。
b. [[車で酔っ払いが騒いでいた]ノ]が警官に捕まった。
- (21) a. **rām-ā:* [syāu demā-e du=gu] kāla.
b. *rām-ā:* [[demā-e du=gu] syāu] kāla.
ラム-ERG 皿-LOC ある ST-NMLZ りんご 取る NFD
「ラムが皿(の上)にあるりんごを取った。」

- (22) a. **pulisā:* [khū: bisyū: wā:=gu] jwana.
b. *pulisā:* [[bisyū: wā:=mha] khū:] jwana.
警官 ERG 逃げる 行く ST-NMLZ ドロボー 捕まえる NFD
「警官が逃げて行ったドロボーを捕まえた。」

主文の知覚・認識動詞の目的語として働く補文タイプは安定的に容認される(23b)。

- (23) a. **mā-nā:* syāu nyānā-ha:=gu nayā.
お母さん-ERG りんご 買う CM-持つてくる ST-NMLZ 食べる NFC
「お母さんがリンゴを買ってきたのを食べた」
- b. *mā-nā:* syāu nyānā-ha:=gu khanā: nayā.
お母さん-ERG りんご 買う CM-持つてくる ST-NMLZ 見る NF 食べる NFC
「お母さんがリンゴを買ってきたのを見て、食べた。」

5.3 長い名詞修飾要素

修飾要素が主名詞 *mā:-mhes-yā:* (お母さん) の属性を表す(24)

修飾要素が内容補充(補文構造)の関係(25)

- (24) *ākha: bwanā-wai=mha kāe-yāta sākka na-ke-gu*
文字 読む CM-くる FD-NMLZ 息子-DAT おいしく食べる-CAUS-NMLZ
tātunā: marhi chunā-cwā:=mha mā:-mhes-yā: kāe wayā
計画する NF パン 焼く CM-いる ST-NMLZ お母さん-CLF.SP-ERG 息子くる CM
athe swayā-cwā=gu wācā:=gu ma-khu.
そのように 見る CM-いる ST-NMLZ 理解する ST=NMLZ NEG-COP.ST
「勉強して帰ってくる息子においしく食べさせることを計画してパンを焼いている
お母さんは、息子が帰ってきてそんな風に見ていることを知らないのだ。」
- (25) *lāekuli-i thāe-thās-e naswā-ka swā:-mā pinā-taye=gu*
王宮-LOC 所-所-LOC 匂いよく 花-CL 植える CM-おく FC-NMLZ
wa sadā: nhyāipu-ka bājā: thā-kā-taye=gu khā: juju-yāta
そして いつも 楽しく 楽器 弾く-CAUS.CM-おく FC-NMLZ 話 王さま-DAT
binti yānā wa tha:=gu bhi-khā-cā chē:-e li-hā: wala.
お願い する CM 彼 自分-NMLZ 粗末な-CL-DIM 家-LOC 後 ADD くる NFD
「王宮のあちらこちらに良い香りが満ちるように花を植え、いつも楽しく楽器を弾
かせておくこと(話)を王さまにお願いして、彼は自分の粗末な家に帰ってきた。」

6. カトマンズ・ネワール語の名詞化と関係節化

O'Rourke (2000) の議論をふり返る。

- (3) a. [mhae] [pujA yA-A-mha] kha:
[farmer] [worship do-STAT-REL] be.STAT
'The farmer is (the one) who did worship.'
b. [mhae-nã: pujA yA-A-gu] kha:
[farmer-ERG worship do-STAT-NOM] be.STAT
'(It is true that) the farmer did worship.'
- (4) a. [mhae] [pujA yA-A-mha manu:] kha:
[farmer] [worship do-STAT-REL person] be.STAT
'The farmer is the person who did worship.'

b.* mhae-nã: pujA yA-A-gu manu: kha:

(3a) (4a) 関係節、(3b) (4b) 名詞化。(4b) の *mhae-nã: pujA yA-A-gu* の後ろに *manu:* を挿入することができないことから関係節と名詞化の構造が異なるとする。

▶ 本稿の立場：(3a) (4a) も名詞化。名詞化辞の機能は広い：名詞句用法、修飾用法、動詞文全体を名詞化（その一部はノダ文相当の=*gu kha:*文（15を参照）

(4b) の容認不可の理由：

①名詞化辞=*gu* とコピュラ動詞 *kha:* の間に名詞 *manu* が割り込んでいる。構造制約の違反：否定辞、ある種の強調辞以外は、文末の=*gu kha:* を割ることはできない。

②名詞化辞+名詞の有生性違反（*動詞句+=*gu manu*）になっている。

▶ 名詞化と関係節化の関係 (Matisoff1972以降、チベット・ビルマ諸語で長い論争の経緯)

▶ DeLancey (1986, 2002), Noonan (1997) 対 Genetti (1992, 1994) の論争

(26) On the basis of such data we can argue that the nominalization function is chronologically and systematically prior to relativization, which merely one specialized function of nominalization. (DeLancey 2002: 66)

同じ形態が名詞化を示す標識として、また関係節の標識として使われる (syncretism 融合)。名詞化がどのようなメカニズムで働くかについては示されていない。

▶ Genetti (1994: 156)：関係節化と名詞化を峻別

(27) a. A relative clause is one which modifies a head noun which may or may not be present on the surface, and which must be absent in the relative clause itself.

b. A nominalized clause is a clause which functions as an independent NP in the sentence and which may have all argument fully specified within it.

▶ 本稿の立場

カトマンズ・ネワール語の名詞化辞の働き：名詞化として連続的な振る舞い

主名詞がある場合：その名詞を限定する修飾機能を担う

主名詞がない場合：修飾要素で限定された有生物か無生物の実体、つまり、名詞に代わるものを指し示す（名詞は文脈により同定可能）

節の場合：修飾要素によって限定されたできごとを名詞相当句として指し示す

文末に現れる場合：文脈に支えられて、指示されたできごとを名詞相当句として指し示す。

その証拠に、名詞化辞によって埋め込まれた部分の述語形が、非一人称非未来のできごとの場合、独立節の述語形 (NFD) とは異なる状態形 (ST) が使われる (10, 11を参照)。

この動詞形のシフトは Givon (2001) : 品詞の時間的安定性 (Temporal Stability) に関わる。

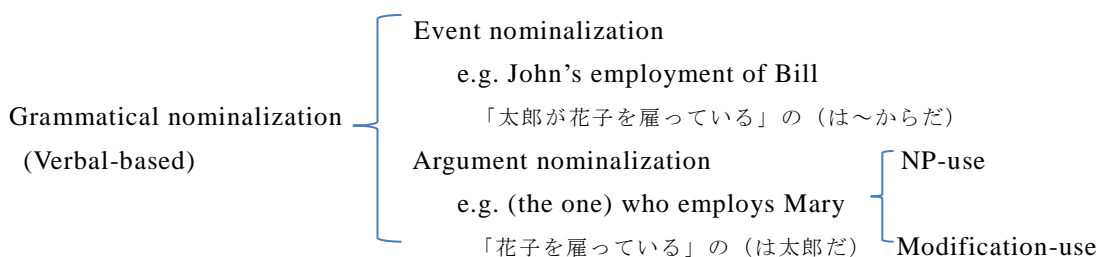
(28) Time-stability scale (Givon 2001: 51)

NOUNS	ADJECTIVES	VERBS
.....		
most time-stable	intermediate states	rapid change

動詞によって描かれたできごと (rapid change/least stable) の時間性を、most stable である名詞に向かって形容詞側にずらす操作 (状態化) だと言える。動詞の場合は必ずこのシフトがかかる (名詞化)。gap の有無による Genetti と O'Rourke の峻別は部分的 (Bickel 2003)。

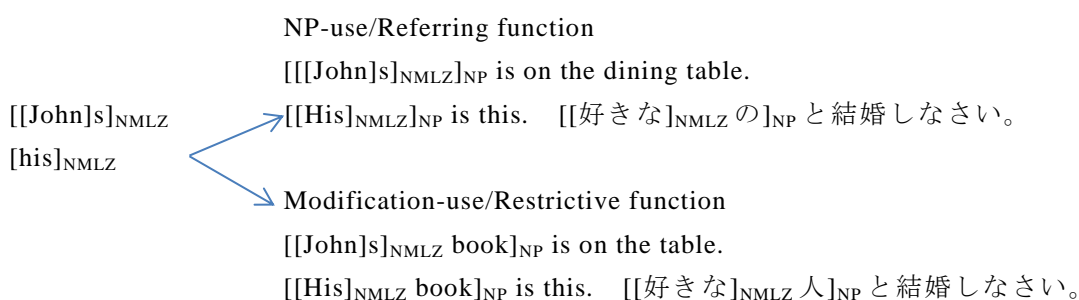
▶ 体系化には柴谷 (2009) Shibatani (2018) の枠組みが有効。

(29) 柴谷 (2009) Shibatani (2018) の Verbal-based nominalization



(29) のうち、関係節は Grammatical nominalization (Verbal-based) の argument nominalization に位置する。主名詞がある場合を modification-use、ない場合を NP-use とする。名詞化は名詞句用法だけでなく節と連続した用法をもつ (event nominalization)。=gu kha:文と文末 =gu 文の現象は Shibatani (2018) では扱われてないが、event nominalization の延長に位置することが想定される。(文末名詞化と発話行為の含意との関係は、チベット・ビルマ諸語でも言語による差が大きく (Watters2008)、今後の課題となる。)

(30) Nominal-based nominalization : Genitive or possessive construction



- 日本語型 : V-based/N-based の、NP-use だけ同じ marking
- 非日本語型 : V-based/N-based の、NP-use も Modification-use も同じ marking

カトマンズ・ネパール語では、V-based の NP-use も Modification-use も名詞化辞を使う。しかし、N-based では、人称によって名詞化辞と属格の出方が異なる。属格は yā。

▶ 一人称/二人称代名詞では名詞化辞が必須。「私の」 *ji-mha/ji-gu*, (*ji=mi* と音韻変化)
 「お前の」 *chi-mha/chi-gu* (*chi=mi* と音韻変化) 類別詞経由の名詞化辞単体

- ▶ 三人称代名詞/固有名詞では属格が必須で名詞化辞は optional、並列される。
「彼の」 *wa-yā(-gu)*、「ラムの」 *rām-yā(-gu)* 機能語としての属格 (+名詞化辞)

また、カトマンズ・ネワール語の名詞化辞として3種あり、=*gu*がもつとも多機能。
=*mha* は名詞、類別詞、名詞化辞として働く。=*pī:*は複数を表す接尾辞から来ていて、名詞化辞としてはごく新しいもの(20世紀?)。

3種の名詞化辞の起源：=*mha* 名詞としては初出1380年、類別詞としては1389年
=*pī:* Classical Newariの辞書項目は「なし」。Kölver (1977)で初出
=*gu* *guli*(類別詞)としての初出1672年→ *gu:*へ。
(NBDC2000より)

7. まとめ

略語一覧

ADD ad-deixis adverbial **CAUS** causative **CL** classifier **CM** concatenation marker **COP** copular **DAT** dative **DIM** diminutive **EMPH** emphatic **ERG** ergative **FD** future disjunct **GEN** genitive **HON** honorific **INF** infinitive **LOC** locative **NEG** negation **NF** non-finite **NFC** non-future conjunct **NFD** non-future disjunct **NMLZ** nominalizer **PL** plural **ST** stative form

参照文献

- Bickel, B. (2003) Referential density in discourse and syntactic typology. *Language* 79-4.
DeLancey, S. (1986) Relativization as nominalization in Tibetan and Newari. Ms. presented at the 19th international Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.
DeLancey, S. (2002) Relativization and Nominalization in Bodic. *Proceedings of the Twenty-Eighth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: Special Session on Tibeto-Burman and Southeast Asian Linguistics*. Berkeley Linguistic Society.
Dixon, R. M. W. (2004) "Adjective Classes in Typological Perspective." In Dixon, R.M.W. & A. Aikhenvald (Eds.), *Adjective Classes*. Oxford: Oxford University Press.
Genetti, C. (1992) Semantic and Grammatical Categories of Relative Clause Morphology in the Languages of Nepal. *Studies in language* 16-2.
Genetti, C. (1994) *A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect*. *Monumenta Serindica* No. 24. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asian and Africa. Tokyo University of Foreign Studies.
Givón, T. (2001) *Syntax: An Introduction*. Amsterdam: John Benjamins.
Hale, A. (1985) Noun phrase form and cohesive function in Newari. In Piper, U. & G. Sticker (eds.) *Studia Linguistica Diachronica et Synchronica*. Berlin: Mouton de Gruyter.
Hale, A. and K. Shrestha (2006) *Newār (Nepāl Bhāsā)*. Languages of the World Materials. LINCOM EUROPE.
Hargreaves, D. (1989) Relative clauses in late Classical and Kathmandu Newari. Presented at the twenty-second annual meeting of the International Conference on Sino-Tibetan Languages and linguistics.

- Keenan, E. and B. Comrie (1977) NP accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8.
- Kölver, U. (1977) Nominalization and Lexicalization in Modern Newari. *Arbeiten des Kölner Universalien – Projekts Nr. 30.*
- 黒田成幸 (1999) 「主部内在関係節」『ことばの核と周辺』くろしお出版
- Malla, K. P. (1985) *The Newari Language: A working Outline*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo University of Foreign Studies.
- 益岡隆志 (2009) 「連体節表現の構文と意味」『月間言語』vol.38-1. 大修館書店
- Matisoff, J. (1972) Lahu Nominalization, Relativization, and Genititization. In J. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics I*. New York: Seminar Press.
- Matsumoto, Y. (1997) *Noun-modifying Constructions in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- 松本善子 (2014) 「日本語の名詞修飾節構文 多言語との対照を含めて」益岡隆志 (他) (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
- 松瀬育子 (2016) 「ネパール語における *gu kha*:文とノダ文」福田嘉一郎・建石始 (編) 『名詞類の文法』くろしお出版
- Nepal Bhasa Dictionary Committee (2000) *A Dictionary of Classical Newari*. Kathmandu: Cwasā Pāsā.
- Noonan, M. (1997) Versatile nominalizations. In Bybee, J. & S. Thompson (eds.) *Essays on language function and language type. Dedicated to T. Givon*. Amsterdam: John Benjamins.
- O'Rourke, M. J. (2000) *Relatively Nominal: Relativization in Kathmandu Nepal Bhasa (Newari)*. Unpublished M. A. thesis. La Trobe University, Victoria, Australia.
- 柴谷方良 (2009) 「日本語準体法再考 体言化と連体修飾」日本語文法学会第10回大会予稿集
- Shibatani (2018) Nominalization in crosslinguistic perspective. In Pardeshi, P. & T. Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 坪本篤朗 (1995) 「文連結と認知図式—いわゆる主要部内在型関係節とその解釈」『日本語学』3月号
- 寺村秀夫 1975-78 「連体修飾のシンタクスと意味—その1~その4」(寺村秀夫 1992 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』くろしお出版所収)
- Watters, D. (2008) “Nominalization in the Kiranti and Central Himalayish Languages of Nepal.” *Linguistics of the Tibeto-Burman Area vol.31.2.*